

研究班番号【 30 】

より良い学校とは ～日米の学校の違い～

英語班:足立 梓、三木 優々菜、山崎 朱璃、尾崎 野々花

Abstract

The purpose of this study is to reveal how to create better educational institutions from the differences between educational systems in Japan and the United States of America. This study reports that education policies and educational systems are different, and there are good points and bad points. For example, the good points are Americans can dye their hair in any color and Japanese can learn group behavior in school curriculums. This study concludes that we can create better schools by combining the good points and creating new systems.

要約

本研究の目的は、日米の学校の違いからより良い学校の作り方を明らかにすることである。調査によって、教育方針や教育制度はさまざまであっても、それぞれ違う良い点や悪い点があるということがわかった。

従って本研究では、それらを組み合わせて新しい制度を作成することによって、より良い学校を創造することができるということが結論付けられた。

1. はじめに

私達は日本の学校とアメリカの学校には大きな違いがあり対照的であると考えたため、両国の学校の良いところ取りをすると、学校をより良いものにすることが出来るのではないかと考えた。

また、より良い学校の定義を、先行研究より、「日本の未来の社会の一員として、そこで必要な精神や技能を養え、社会イメージを向上させることができる」という教育モデルと、アメリカの「生徒に達成感、自律性、協調性を持たせる」という教育モデルから、未来の社会の一員として、そこで必要な精神や技能を養える学校とした。

また、私達はそのために身につけるべき事として、みんなで協力する集団行動の力や、礼儀や常識、尊重性があると考えた。

2. 研究方法

1. 日本とアメリカの校則と学校制度、学校生活について違いを調べる
2. それぞれの良いところ、悪いところをあげる。
3. それらの良いところを組み合わせることによって、より良い学校の作成方法を考えていく。

3. 結果

《結果1》

校則の違いについて、日本は髪染めやピアスが禁止で制服の規定があるということなど、見た目についての校則が厳しいのに対して、アメリカは見た目についての校則は緩いが、暴力を冒したり、成績不振の生徒は退学になるなど、罰則が日本よりも厳しい。

このような特徴の違いは、日米の校則の必要性にもよく表れており、アメリカの校則の必要性は、「個人の責任、許容できない行動、及び適切な懲罰基準、対応を定義することで秩序正しい教育活動が維持できる。」という考えに基づくものになっており、日本の校則の必要性は、「すべての児童生徒のそれぞれの人格のよりよき発達を目指すとともに、学校生活がすべての児童生徒にとって有意義で興味深く、充実したものになることを目指している」と言う考えに基づくと

また、アメリカと日本の長期休みの違いは、日本の夏休みは約1ヶ月あり、多くの休み期間は宿題が出される、アメリカの夏休みは約3ヶ月と、日本よりも長いものであるが、宿題はなく、クリスマスの期間が1週間休みになるなど、他にも日本にはない休みがたくさんあることがわかった。その他の学校生活の違いは日本は掃除当番があり、部活動が通年同じ部活に所属しなければならないが、アメリカは、掃除当番が無く、部活動が季節によって変わる。

《結果2》

日本の学校の良い所は、掃除当番や部活動が通年同じ部活であることにより、集団行動力が身につくこと、休暇中の怠け防止のための宿題が出されることなどが挙げられる。

アメリカの学校のいい所は、髪染めや服の規定がないなど、個性を尊重できること、義務教育が高校までであることなどが挙げられる。

日本の学校の悪い所は、大学受験の負担が大きいこと、校則によって行動が縛られ、判断力が身につかないことなどが挙げられる。

アメリカの学校の悪い所は、中卒率が高いことや休みが長いことなどが挙げられる。

4. 考察

校則について尊重性を高めていくという点では、個性の尊重の観点から、見た目に関する校則はピアスや髪色、服装の自由など、アメリカのように緩い方が良いと考えた。

次に集団行動力を身につけるために、日本のような掃除当番や給食当番、クラブ活動は集団行動の力につながると考えたため、日本のものである方が良いと考えた。

そして、礼儀や常識を身につけるという面から、長期休みは日本のような多量の勉強課題ではなく、長期休みでしか出来ないようなボランティア活動などの課外活動を行うというような課題を準備すべきだと考えた。しかし、宿題がなかったら勉強が疎かになってしまうので日本ほどの量ではなくてもある程度の宿題はあった方がよいと考えた。

また、怠った生活の継続の可能性と勉強能力の低下の可能性を考えて長期休みの長さは日本のように1ヶ月程度が適していると考えた。

5. まとめ

本研究では、日本とアメリカの校則や学校制度、学校生活の違いについて調べ、それぞれの良い点、悪い点をあげた。

そこから、それぞれ国によって教育方針や教育制度は様々であることが分かった。

日本の教育とアメリカの教育は、手法は違っているとしても、それぞれに良い点と悪い点があり、日本、アメリカの学校の、先行研究から考えた、それぞれの良い点を組み合わせて、新しい制度を作成することによって、生徒がより良い学校生活を送ることのできる最良の学校になるのではないかと考えた。

6. 参考文献ならびに参考Webページ

「子どもから見た学校という場とその変容 一中学校生徒会誌を題材に-」元森絵里子(2004)

「アメリカ人研究者からみた日本の特別活動の特質 一日本型教育モデルの発信を視野に入れて」筑波大学 京免 徹雄(2021)

「日米比較から見る日本の教育モデルと望ましい学級経営について」監物広野(2014)